

此ク語り傳へタルトヤ、

〔大和物語〕^上むさしのかみのむすめ、

略○中

かたちきよげにかみながくなどして、よきわかうどに

なんありける、いといたう人々けさうしけれど思ひあがりてをとこなどもせでなんありける、

〔十訓抄〕^四堀河院御時、中宮の御方に半物に砂金といひて、ならびなき美女有けり、兵庫頭源伸正

なれ思けり、其比殿の前駈の人々、鴨井殿に集りて、酒のみける次に、ある人かの砂金が事をかた

り出して、一日内裏にてねり出たりしかぎりあれば、天人も是にはまさらじとこそ見えしか、世

にあらば、かやうなるものをこそ、このよの思出にもせまほしけれといふ、略○下

〔源平盛衰記〕^{十六}菖蒲前事

鳥羽院ノ御中ニ菖蒲前トテ、世ニ勝タル美人アリ、心ノ色深シテ形人ニ越タリケレバ、君ノ御糸

惜モ類ナカリケリ、雲客卿相始ハ艶書ヲ遣シ情ヲ係ル事隙ナカリケレ共、心ニ任セヌ我身ナレ

バ、一筆ノ返事何方ヘモセデ過シケル程ニ、或時頼政菖蒲ヲ一日見テ、後ハイツモ其時ノ心地シ

テ、忘ル、事ナカリケレバ、常ニ文ヲ遣シケレドモ、一筆一詞ノ返事モセズ、頼政コリズマニ又遣

シ遣シナンドスル程ニ、年モ三年ニ成ニケリ、何ニシテ漏タリケン、此由ヲ聞食ニ依テ、君菖蒲ヲ

御前ニ召、實ヤ頼政ガ申言ノ積ナルト繪言アリケレバ、菖蒲顔打アカメテ御返事詳ナラズ、頼政

ヲ召テ御尋アラバヤトテ、御使有テ召レケリ、比ハ五月五日ノ片夕暮計也、頼政ハ木賊色ノ狩衣

ニ、聲華^{ハナヤカ}ニ引繕テ參上、縫殿ノ正見ノ板ニ畏テ候ス、院ハ良ヤ遙計^{シラ}シテ御出アリケルガ、ジツホウ

ノ者ニハ、物仰ニクケレバドテ、殊ニ睨ヲ含マセ御座ス、何事ヲ被仰出ズルヤラント思フ處ニ、誠

カ頼政菖蒲ヲ忍申ナルハト御定アリ、頼政大ニ失色、恐畏テ候ケリ、院ハ憚思フニコソ勅定ノ御

返事ハ遅カルラヌ、但菖蒲ヲバ誰ソ彼時^{カドキ}ノ虚目歟、又立舞袖ノ追風ヲヨソナガラコソ慕フラヌ、

何カハ近付キ其驗ヲモ辨ベキ、一目見タリシ頼政ガ眼精ヲ見バヤトゾ思食ケル、菖蒲ガ歳長ケ